

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 25 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370819

研究課題名(和文) 伝世・出土文献所見の系譜関係資料による先秦家族史の再構築

研究課題名(英文) The Reconstruction of Pre-Qin History through Genealogical Materials in the Transmitted and Excavated Texts

研究代表者

小寺 敦 (KOTERA, ATSUSHI)

東京大学・東洋文化研究所・准教授

研究者番号：30431828

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：中国語圏や米国の美術館・博物館等で資料調査・収集に努めつつ中国先秦時代の系譜関係資料の蓄積を図り、国の内外で研究報告を行った。そしてその資料が豊富な『春秋左氏伝(左伝)』などの伝世文献や、清華簡『繫年』などの出土文献の記事を相互に比較しつつ、今日の中国湖北・湖南を中心とする楚地域における文献の成立・受容を通して地域の枠組みが思想的に形成されていく過程を議論し、中原中心的家族史の見直しを行った。

研究成果の概要(英文)：While I made efforts to research and collect materials in museums of Chinese language area and the United States, I tried to accumulate genealogical materials in the Pre-Qin period of China, and made reports on this subject in Japan and foreign countries. I compared sentences of the transmitted texts such as "Chunqiu Zuoshizhuan(Zuozhuan)" with the excavated texts such as Qinghua Bamboo Slips "Xinian", argued the process of ideologically forming the regional framework through the adoption of the texts in Chu region, which corresponds to Hubei and Hunan Provinces in China today as the central area, and reviewed the Zhongyuan-dominated family history.

研究分野：中国古代史

キーワード：系譜 先秦時代 出土文献 清華簡 繫年 伝世文献 楚地域 家族史

1. 研究開始当初の背景

系譜は社会の血縁秩序を明示し、その秩序の基盤となる思想と関係をもつ。系譜は今日においてもなお一定の社会的意味をもち続けているが、東部ユーラシア地域においては、その源流は中国の先秦時代へと遡る。ただ先秦時代では、後代の族譜のように文献としての系譜が社会に普及していたわけではなく、甲骨・金文を始め、系譜そのものが書かれた文献は存在するものの、その時代の系譜の多くは、説話資料などに登場する人物名から推定・復元される必要がある。

伝世文献に基づく先秦時代の系譜復元については、前近代以来の研究蓄積がある。代表的なものに清代の顧棟高『春秋大事表』五十巻があり、その一部では伝世文献をもとに先秦時代の君主や有力氏族の系譜が再構成されている。近代に入ると、歴史学・社会学・人類学など、欧米の知の観点から系譜が議論の対象となり、特に歴史学と思想史学では、中国古代社会、そしてその家族制度を解明するための重要な要素・資料として扱われた。加藤常賢『支那古代家族制度研究』(岩波書店、1940年)、楊寬『古史新探』(中華書局、1965年)など、およそ1970年代頃まで、先秦時代の系譜関係資料をもとにその家族制度の実態が盛んに議論された。出土資料における系譜についても研究が進み、例えば呉其昌『金文世族譜』(中央研究院歴史語言研究所、1936年)は金文から先秦時代の系譜を復元した。このほか社会経済史では五井直弘『中国古代の城郭都市と地域支配』(名著刊行会、2002年)が系譜資料によりつつ、先秦時代における氏族の分枝と梟の成立との関係について考察し、宗教史では池澤優『「孝」思想の宗教学的的研究』(東京大学出版会、2002年)が金文などにみられる系譜関係資料により、親族組織の範囲などを議論している。このように系譜研究は系譜そのものの考証に終わるのではなく、多くの学問分野と繋がりをもち、潜在的な発展性・応用性を有する。

だが近年では日本での先秦時代系譜関連分野の研究はさほど活発とはいえない。他方、中国大陸では研究の数こそ日本より多く、朱鳳瀚『商周家族形態研究(増訂本)』(天津古籍出版社、2004年)のように甲骨・金文などを丹念に検討した業績もあるが、従来の先秦史研究の枠組みを突破する斬新なものはない。そうした中で注目されるのが、近年、中国大陸で続々と発見されている出土文献である。これには郭店楚簡・睡虎地秦簡などの発掘簡や、上博楚簡・清華簡など出土の不明な非発掘簡も含まれる。新出土簡牘には伝世文献と内容の異なる文章がかなり含まれる。つまりそこから再構成される系譜も異なる。

拙著『先秦家族関係史料の新研究』(汲古書院、2008年)では、先秦時代の家族について検討する前段階として、伝世文献・出土

文献の家族関係記事を検討し、それら文献の背後に戦国王権の存在と影響を想定した。その後、若手研究(B)では家族関連の習俗に着目した。文献に現れる先秦時代の「讓」に焦点を絞り、素朴な「讓(ゆずり)」の慣習が戦国王権に利用され、「禪讓」のような非常に倫理的・政治的な意味を有していったと考えた。このように先秦時代の王権を背後に控えた文献の成立は、その家族関係諸方面で極めて大きなインパクトを与えたことが推測された。そこで拙稿「先秦時代系譜編纂の成立過程とその意義」(『歴史学研究』898、2012年)では、伝世・出土文献に見える系譜関係資料を選択的に取り上げ、戦国時代における系譜関係文献編纂の背後には、直接・間接に戦国王権の影響があり、その影響を受けて成立した文献が、また王権や社会の側を逆に規定していくことにもなり、加速度的に家族に関連する思想が変化したとする見通しを述べた。拙稿「地域・文化概念としての楚の成立 清華簡を手掛かりとして」(渡邊義浩編『中国新出土資料学の展開』、汲古書院、2013年)では、清華簡『楚居』の楚王系譜記事を手掛かりに、盛んな文献編纂状況によって広域的な楚の地域意識が生じ、加速されたとする見通しを論じた。但しこれらはあくまでも限られた資料に基づく推測であり、系譜関係資料を個別かつ詳細に検討していく作業が必要である。本研究ではそこが出発点となった。

2. 研究の目的

本研究は3年の期間内に先秦家族史研究の再構築までを視野に入れた。だが限られた研究期間内におけるさしあたっての目標としては、2012・2013年の上記2拙稿の見通しを立脚点とし、『左伝』・『国語』などのような先秦時代の成書、もしくはその可能性がある部分を含む主要な伝世文献、および金文、郭店楚簡・上博楚簡・清華簡といった簡牘を含む、系譜関係資料の豊富な先秦出土文献を検討対象とする。そしてそれらにおける系譜関係資料を網羅的に精査した上で、先秦時代の系譜の成立と展開に関する具体像を明らかにしていくこととしたい。

研究期間内に明らかにすべき事柄は、大きく分けて3つある。(1)甲骨・金文といった祭祀用の文字記録媒体と、伝世文献も紙に筆写される以前はそうであった簡牘文献とは、いずれも系譜そのものないし系譜の材料を含むが、その用途は全く異なる。甲骨・金文における系譜は祭祀対象・範囲を示す指標であり、当時の親族集団の規模も表す。簡牘文献のそれは、特定人物・氏族の血縁を示すばかりではなく、思想的な意味や予言記事と絡めて用いられるなど、非常に複雑かつ多様である。その間のギャップを丁寧に調べることにより、記録媒体の変化が系譜関係資料の成立にどのように影響を与えたのかが明らかになると考えている。(2)一般に、戦国

時代になると簡牘文献が次々に編纂されたことが、出土資料の状況や、元は簡牘文献であった伝世文献の研究から推測されている。戦国時代の簡牘文献や戦国時代に淵源をもつか成立した可能性のある伝世文献を比較検討することにより、系譜関係資料成立の背後にある状況が見えてこよう。(3)系譜は祖先や血縁範囲を示すものであるがゆえに、家族・血縁集団に対する当時の意識をも反映する。伝世・出土文献にはそういった意識を示す資料が数多く存在する。系譜関係資料を精密に調査することにより、家族意識のあり方の変化を跡づけることができる。

なお研究の進捗に伴う新たな知見、特に新出土資料の発見により、上記の方針に部分的な変更が加えられる可能性はあるが、それは本研究の大きな方向性には影響しない。

3. 研究の方法

本研究では3年の全期間にわたり、伝世・出土文献における系譜関係資料の詳細な調査を行う。主目的はその作業をもとにした論文執筆である。

平成26年度は系譜関係資料が膨大な『春秋左氏伝(左伝)』に関する網羅的な検討から始める。本研究の起点となる2012年度の系譜に関する業績により、『左伝』では西周金文など古い文献によくある遠い祖先と近い祖先の記事と、後の時代の文献で増加する、遠近の祖先間を繋ぐ記事とが混在することを予測した。『左伝』における系譜関係資料を全て記事の性質毎(血縁関係を専ら示すもの、直接的に祖先祭祀と関係するもの、思想性と強く関係するもの、系譜を示す以外に何らかの評価を含むもの、予言記事など)にカテゴリ分けしながら、そこに見られる祖先間の世代深度や系譜の語られ方を検討していく。それに加えて、戦国時代に統治者階層となった人々の祖先や、そこから外れた人達が、系譜関係資料でどのように扱われているかを調べる。小倉芳彦『中国古代政治思想研究』(青木書店、1970年)は、『左伝』が文章形式により、少なくとも古(経文など)・中(説明的部分)・新(君子の評言や予言記事)の3層からなる、段階的に成立した文献であるとみる。私も基本的にその見解に同意するが、検討の際はその観点からの分析も加える。資料が同じ系譜カテゴリーに属しても、その文章形式により更に細分されることになる。文献のこうした重層性を分析に含めることにより、春秋戦国時代における系譜関係資料がどのようにテキスト化されていくか、その過程が見えてくるだろうし、更に系譜関係資料を含む文献としての『左伝』の資料的性格をもより明らかにできる。

他方、出土文献の重要性は伝世文献に優るとも劣らない。最近、清華簡『繫年』という非発掘簡が報告され、注目を集めている。当初、『繫年』は『竹書紀年』と同類とされたが、その報告書を見る限りでは系譜関係の資

料を豊富に含んでおり、『左伝』の説話に似た歴史説話集としての性格が強いものと私は認識している。そこで上記『左伝』の検討とともに、清華簡『繫年』の釈文作成を行いながら、その系譜関係資料を検討する。伝世文献と類似の形式の出土文献を検討することにより、その伝世文献の資料的性格も同時に浮かび上がることが期待される。但し『繫年』の分量は竹簡138本に及ぶ大きなものであるため、1年目はその一部について検討する。この作業は、私も所属する楚簡研究会の代表者の谷中信一(日本女子大学・中国思想史)ほか参加者を研究協力者として行う。その協力者からは、中国思想史・中国文学など、歴史学以外の分野の多様なディシプリンを本研究に積極的に取り込む効果を見込んでいる。

これらの研究成果を発表する場としては、国の内外を問わず、学会報告や学術雑誌・紀要が想定される。

そして本研究の基礎・補助として『左伝』等の系譜関係資料に関するテキストデータベースを作成する。この作業は本研究の全期間にわたって継続される。

本研究に関連する資料は、国内では東京近辺と京都・大阪近辺に多い。そこで京都・大阪近辺の研究機関(京都国立博物館・奈良国立博物館など)へ赴いて資料収集・調査を行う。

また橋本秀美(北京大学)・曹峰(清華大学)・呂静(復旦大学)・張昌平(武漢大学)らを研究協力者として、中国大陸に1~2ヶ月ほど滞在して研究を進め、その機会を利用して本研究に係る資料収集・調査を行う。そして平成26年10月には、「言語と文字」をテーマとした台湾の国際シンポジウムに参加し、林清源(台湾・中興大学)を研究協力者として、本研究に関連づけて系譜資料の文字化(テキスト化)について報告を行う。

27年度は、伝世文献では『左伝』以外で系譜関係資料を多く含む『国語』・『詩経』・『尚書』などを網羅的に調査する。『国語』は説話記事のみの『左伝』ともいえる形態の文献であり、かねてより『左伝』との比較研究がなされてきたが、本研究では系譜関係記事の側面から掘り下げていくことになる。『国語』はその形式上、『左伝』のようなテキストの年代層による分類という手法をとりにくい。『左伝』の説話記事をカテゴリー分析する手法は応用できる。『詩経』・『尚書』は最も古く遡り得る伝世文献ともされるため、系譜の古い形態を理解する手掛かりになる。また古代に発掘された年代記の『竹書紀年』などについても検討していく。

出土文献では清華簡『繫年』について、釈文の作成を進める傍ら、系譜関連資料を調査・検討する。27年度も上記楚簡研究会と連携しつつ、釈文を作成し、その資料的性格を検討した上で進める。

本年度においても、京都・大阪近辺の研究機関で本研究関連の資料収集・調査を行う。また中国大陸へ赴き、曹峰（清華大学）・呂静（復旦大学）・瀨瀬薫雄（復旦大学）らを研究協力者として、資料調査・収集を行う。これは28年度も同様である。

28年度は完成年度として、1・2年目で行った伝世文献と出土文献に関する検討の成果に加え、その他の伝世文献や、金文や郭店楚簡・上博楚簡・清華簡といった簡牘の説話関係資料もあわせて分析し、先秦時代の系譜関係資料について総合的に研究する。これら資料については、過去に既に検討済みや現在検討中のものもあり、その成果も積極的に利用する。

伝世文献が一般に中原地域中心もしくは地域を捨象した観念を反映しているのに対して、出土文献はしばしば出土地など特定地域の観念を反映する。伝世文献の中原ないし汎地域的な傾向に、出土文献のもつ地域性を加えて分析することにより、先秦時代の歴史をマクロ（汎地域的）とミクロ（特定地域）の視点から立体的・重層的に把握することが可能になる。戦国時代になると簡牘文献が激増することが考古発掘などにより推測されるが、本年度の総合的分析により、簡牘文献の成立・増加と系譜の成立・展開における相互の影響関係が見えてくるであろう。また、先秦時代の簡牘文献は、量的に南方の楚地域に偏っている。こうした事情もあり、近年は楚地域の独自性に注目が集まりつつある。本年度は楚地域の歴史に系譜の側面から光を当てるとともに、中原王朝中心の単線的な歴史把握の枠組みを新たに組み直す契機としたい。

なお、最近は毎年のように新出土資料が発見・報告されるので、もし本研究に深く関わる資料が発見されれば、そちらに出土資料研究の労力を割くことはあり得る。いずれにせよ、研究の目的や方法に大きな変更はない。

4. 研究成果

平成26年度は、3年計画の本研究の初年度として、系譜関係資料が膨大な『春秋左氏伝（左伝）』などの伝世文献に関する検討を行った。世継ぎの意味の「後」は、前近代中国では男系継承による血縁集団を維持する要として極めて重大な意味をもった。『左伝』等に見える「後」に関するテキスト型データベースを作成しつつ、東京国立博物館・根津美術館等において資料収集・調査を行った。その成果は「『左傳』における「後」について」（『東京大學東洋文化研究所紀要』167、東京、2015年3月）である。『左伝』におけるその意味を有する「後」の用例を軸として、これに『詩』『書』および金文における事例も加えて検討した。そして『左伝』の「後」は、西周もしくはそれ以前からの古い血縁集団に対する強い関心がありつつも、その実態

は春秋戦国期以降の社会を反映したものであることを見出した。このことは、春秋戦国以降の社会が、その実際は西周以前のそれから離れつつも、社会秩序の基盤はその古い段階に置かれていたことを示しており、そうした秩序化に誘導する役割を演じたのが『左伝』のような文献ではないかと考えた。

また、国立中興大学（台湾）の林清源氏のお招きを受け、他の科研プロジェクトにおける清華簡『繫年』の譯注作成作業を利用した研究報告「清華簡『繫年』所見戦国時代的「楚」認識」（第十届通俗文學與雅正文學「語言與文學」國際學術研討會、国立中興大學、台湾台中市、2014年10月24日）も行った。清華簡『繫年』の資料的性格を議論すると共に、戦国時代における地域意識の成立において、このような文献が大きな役割を果たしたことを議論した。

そして、6月には北京大学の橋本秀美氏の紹介により、北京大学歴史学系に滞在し、現地にて資料収集・研究活動を行った。その際、武漢大学の張昌平氏のご協力により、湖北省の武漢・随州などの研究機関・遺跡も訪れ、調査活動を行った。

平成27年度は、3年計画の本研究の第2年度として、前年度に引き続き系譜関係資料の蓄積に努めた。その一方で、恒生管理學院（香港）の張光裕教授・袁國華教授のお招きを受け、シンポジウム「中國古代泉幣與經貿國際學術研討會暨中國語言文化研習所成立三周年慶典」において研究報告「先秦時代的交換婚：與貨幣史的展開相對照」を行った。婚姻関係資料は系譜資料の重要な部分を構成し、婚姻は「貨幣」「交換」と関連づけて説明されることがある。それについての研究史を辿りつつ、特に伝世文献の『左伝』における交換婚記事について再検討するとともに、そのテキスト中における描かれ方を論じた。そして文献の記載内容を資料として取り出すことから生じる、「先秦文献の陥穽」とも言うべき一種のテキストの歪みから離れ、過去の研究が法則性を求めた点について再評価を行った。また「清華簡『繫年』第十五章の「少」（上部が孔、下部が皿の字）」について」（出土資料と漢字文化研究會編『出土文獻と秦楚文化』9、2016年3月）では、先秦時代の希少な出土文献年代記である清華簡『繫年』において、『左伝』『国語』など伝世文献にも見える夏姫説話を扱った。伝世文献における夏姫なる女性はかなり積極的な役割を演じるが、『繫年』では単なる登場人物に過ぎない。婚姻関係の事実を重視する伝世文献と比較して、この女性の描かれ方が『繫年』の特徴になっているのではないかと考えた。

そして8月には吉林大学の呉良宝教授らのお招きにより、シンポジウム「“出土文獻与學術新知”學術研討會暨出土文獻青年學者論壇」に参加させていただき、新出土資料に

関する討議に加わった。9月には、他の科研費による調査・訪問を利用し、復旦大学・上海博物館等へ出向いた。国内では8月に長野県における中国古代史の研究合宿に参加し、当該分野の諸問題につき、専門領域を超えた議論を行い、また上記出張いずれでも資料調査・収集を行った。

平成28年度は、3年計画の最終年度として、引き続き系譜関係資料の蓄積に努めた。所属機関から復旦大学文史研究院に派遣された機会を活用し、上海博物館を始め、蘇州・寧波などといった上海近隣都市、また北米の美術館・博物館等で資料調査・収集を行った。

そして中国の国際シンポジウム「北京論壇」に参加する機会を得たことを利用し、研究報告「『關於清華簡《繫年》的女性』」を行った。楚地域の出土資料である清華簡『繫年』に現れる女性の描かれ方に焦点を当て、『左伝』『国語』など伝世文献との対比を通じて『繫年』の資料的性格を検討した。伝世文献には時として大きな影響力を有する女性が現れるが、『繫年』では同一女性の存在感は概して希薄であり、これは『繫年』が単に資料としての価値観によるのではなく、楚の王居の変遷を描く清華簡『楚居』と共通する部分からみて、楚地域の地域的特色である可能性を唱えた。楚地域は中原文化圏にとって他者であり、これは中原中心史観を見直そうとする本研究の理論面での総括である。

また先秦時代の年代記風同時代資料として他に比類のない清華簡『繫年』について、「清華簡『繫年』訳注・解題」を公表した。そこではその詳細な訳注を作成すると共に、『繫年』の内容がその成書時期に楚が置かれた状況を反映し、その読者は楚に都合よい歴史認識を得たこと、そういう意味で『繫年』は『楚居』とも共通性を有する文献であることを論じた。これは本研究の出土文献研究面における総括である。

本研究は楚地域出土資料の不断增加を背景に、当初計画で予定されたよりも更に楚地域の歴史分野に労力を集中して進めることとなった。だが、それにより目標とする中原中心・『史記』史観的家族史の枠組みを見直す契機とすることができたと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3件)

小寺敦、清華簡『繫年』譯注・解題、東京大学東洋文化研究所紀要、査読有、170巻、2016、135-420、リポジトリ <http://hdl.handle.net/2261/72184>

小寺敦、清華簡『繫年』第十五章の「少◆(孔+皿)」について、出土文献と秦楚文化、

査読無、9号、2016、17-31

小寺敦、『左傳』における後について、東京大学東洋文化研究所紀要、査読有、167巻、2015、1-62、リポジトリ <http://hdl.handle.net/2261/56584>

〔学会発表〕(計 3件)

小寺敦、關於清華簡《繫年》的女性、北京論壇、2016年11月4日、北京(中国)

小寺敦、先秦時代の交換婚：與貨幣史的展開相對照、中國古代泉幣與經貿國際學術研討會暨中國語言文化研習所成立三周年慶典、2015年7月13日、香港(中国)

小寺敦、清華簡《繫年》所見戰國時代的「楚」認識、第十屆通俗文學與雅正文學「語言與文學」國際學術研討會、2014年10月24日、台中(台灣)

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
<http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/faculty/profile/kotera.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小寺 敦 (KOTERA, Atsushi)
東京大学・東洋文化研究所・准教授
研究者番号：30431828

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者 (順不同)

張光裕 (恒生管理學院)

袁國華 (恒生管理學院)

橋本秀美 (北京大学)

曹峰 (清華大学)

張昌平 (武漢大学)

吳良宝 (吉林大学)

呂静 (復旦大学)

廣瀨薰雄 (復旦大学)